

＜武蔵名勝図会より＞ 絵 安藤 修二

何度でも来たくなる奥多摩づくり

昭和30年に氷川町・古里村・小河内村の3町村が合併し、奥多摩町が誕生しました。今年誕生から60年目の節目の年になります。この60年間の観光の変遷を見ますと、昭和31年には現在の協会の前身となる奥多摩観光協会が発足、翌昭和32年には小河内ダムが完成、昭和33年には、東京都で最初の国民宿舎「思源荘」が、昭和35年には国民宿舎「鳩の巣荘」が完成するなど、多くの観光客で賑わっていたそうです。

しかし、その後レジャーの多様化、旅行スタイルの変化などにより、当町の観光客数は減少傾向となりました。入込客調査を見ますと平成8年は206万人、平成13年は170万人、平成18年は144万人と10年間で62万人も減少しておりました。こうした状況の中、平成18年に「森林セラピー」取組みのための検討を開始し、平成20年に都内初の「森林セラピー基地」の認定を受けました。以来、森林セラピーの普及に努め「癒しのまち」としての認知度が向上し、また、登山をはじめとしたアウトドアブームの到来などにより、若者や外国人の来訪

者も目立つようになり、平成24年の入込調査では176万人と調査開始以来、初めて増加へと転じることができました。

しかし、その内訳を見ますと宿泊観光客は16万人で全体の9%という低いものでした。このことを踏まえ、今後、宿泊観光へと発展させるため、平成25年度に鳩の巣荘の建設を開始し、本年5月に「奥多摩の風 はとのす荘」としてグランドオープンいたしました。これを契機に宿泊観光を発展させるとともに、一層の観光客誘致を図り、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、インバウンド観光（外国人旅行者を招くこと）にも注力するため「日本一観光用公衆トイレがきれいな町」を目指し、トイレの改修、清掃方法の見直しなどを進めていきます。さらに（一社）奥多摩観光協会をはじめ町内の様々な観光関連事業者や東京都と協力し、「また来たくなる奥多摩、何度でも来たくなる奥多摩」の実現を目指して行きたいと思っております。

（奥多摩町観光産業課長 原島 滋隆）

～とっておきの山歩きガイド～

七ツ石山 (1757m)

東京都と山梨県の県境に位置する山。単独で登るというより、東京都の最高峰である雲取山への通り道にある山のイメージがあります。

奥多摩駅から鴨沢西行のバスで 40 分(¥630)。鴨沢バス停(550m)にはきれいなトイレもあり女性にはうれしい配慮です。時々、野生のサルが道路を横切る姿を見ることもあります。トイレの脇から急坂を登り、集落の中を抜け林道に出ます(小袖乗越 760m)。少し行くと左に登山道があり林道と分かれます。

登山道を登って行くと左側に廃屋(940m)が見えます。さらに、高度を増して行くと水場(1100m)に出ます。細い管が登山道に引いてあり、水が少し出ています。

展望がないまま登り続け、堂所(1250m)という平らな休憩ポイントに着きます。堂所から傾斜がきつくなり高度を上げて登って行くと、七ツ石小屋分岐(1570m)に着きます。左に行くとブナ坂、右に折れてすぐ運が良ければ、富士山を見ることができます。そして、七ツ石小屋(1580m)に着きます。素泊りのみでチップ制のバイオトイレも完備。ここで昼食をして頂上をめざしてもいいでしょう。

体力に余裕があれば急登を登って頂上。時間がかかるがブナ坂経由で頂上をめざすこともできます。頂上からの景色は雲取山がよく見え、南アルプス、富士山も望めます。

下りは将門伝説の七ツ石、朽ち果てた神社をとおって、①七ツ石山小屋経由で来た道に戻る方法 ②鷹ノ巣山経由で奥集落へ下山する方法 ③千本ツツジを通り鷹ノ巣分岐迄進み赤指尾根へ下る方法。③を進むと林道に出る迄ひたすら下ります。途中、クマが樹液をなめるために皮をはいだ桧や杉を何本も見られます。林道からさらに峰谷の集落を通りながらバス停まで歩きます。ここからバスで奥多摩駅(¥600)に戻ります。七ツ石山は、雲取山迄は自信がないけれど七ツ石山迄だったら登れるかな。奥多摩の三大急登程でもなく、多少のきつい登りはあるものの歩き易い展望のよい山です。(島崎 やす子)

山里歩き ～奥集落～

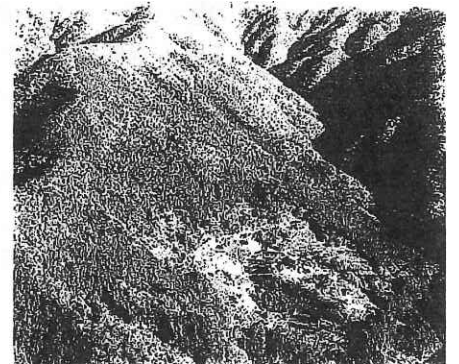
奥多摩の西に位置する、旧小河内村の峰谷地域には、峰、奥、下りの集落があり、峰谷川に沿って広がっています。旧小河内村のほとんどの集落は、小河内ダム建設により水没してしまいましたが、この峰谷地域は水没せずに残った地域で、山深い山村の文化が残っています。

奥多摩駅方面から、国道 411 号(青梅街道)を山梨方面に進むと、奥多摩湖が左に見えてきます。さらに進むと、赤いアーチの「峰谷橋」が見えてきますので、この峰谷橋の交差点を右折して、峰谷川沿いに進むと峰谷地域です。(バスの終点は下り集落の「峰谷バス停」です。)奥集落へは、下りの集落を通りさらに峰谷川沿いに進みます。途中には、奥多摩自然文化百選に選定されている「雨降り滝」があります。その先の「三沢橋」で道が二手に分かれますので、右へと進むと、奥集落になります。「奥」はその名もズバリ「山中深く鷹ノ巣山の懐に抱かれた場所」で、標高は約 800m、山里歩き絵図には「(No19)天界の里へ」と題して紹介されています。

奥集落からは、浅間尾根を経て鷹ノ巣山への登山道があり、人気コースの一つになっています。この登山道の途中には、浅間神社があります。奥多摩町誌には「浅間神社は富士信仰の神社で、富士山に見えるようなところに祭られて、多くは浅間神社と呼ばれこの神社にゆかりのある所に仙元峠とか、浅間尾根とかの地名があり(後略)」とあります。

この浅間神社は、奥集落から 20 分ほど登山道を登った、浅間尾根の中腹に鎮座しています。現在は、周辺の木々が大きくなり、なかなか見えなくなりましたが、数十年前はこの場所まで登ると、富士山が見えたものです。

〈写真は奥集落、中央鷹ノ巣山〉
(河村 寿仁)



～「四季つれづれ」その10～

「六ツ石山における二人遭難」

前号では今年の1月28日、本仁田山における二人の遭難事故を書いた。

複数の登山者が一度に遭難死するなどということはアルプスなどの山域ではめずらしいことではない。雪崩や低体温症での遭難事故はよく聞く。しかし奥多摩における複数名の死亡事故は、本仁田山での事故以外で私の扱った事故は、平成10年の9月、六ツ石山に登って下山する際に道に迷い、三ノ木戸の岩場から転落し死亡した二人の高齢者事故があるだけだ。

平成10年9月30日夜、都内のある山岳会から青梅警察署に捜索依頼があった。山岳会の定例山行前に下見のため六ツ石山に登った二人が帰宅しないというもので、私にも明日捜索する旨の連絡があった。

翌朝目を覚ますと、外は冷たい雨が降っていた。未帰宅者はいずれも高齢の男性でSさん(68歳)とHさん(67歳)である。二人は朝、小河内ダムからトオノクボ経由で六ツ石山に登り、石尾根を氷川に下山するというポピュラーな山行計画であった。あのコースで迷い込みそうなところはないのだが。

捜索隊は3個班に分かれて、雨の中をそれぞれ違う登山道に入山した。台風の影響で大木が倒れるなど、登山道は荒れていた。どの班も風過ぎに六ツ石山頂に到着したが、何の情報も得られなかった。雨の当たらない木の下で弁当を食べ、またそれぞれ違うコースを捜索しながら下山した。

午後5時、どの班も濡れ鼠となって救助隊本部の奥多摩交番に戻ったが、遭難者の手掛かりはなかった。行方不明者二人もどこか岩の窪みにでも入って、この雨をしのいでいてくれればと祈る気持ちであった。

10月2日、雨は上がったが濃い霧の中、警備犬3頭も加わり、六ツ石山から三ノ木戸集落跡の下を流れる小中沢周辺を重点的に捜索することになった。私は情報収集、無線担当として本部に残った。

各新聞が朝刊で「六ツ石山から二人帰らず」と報道したおかげで、目撃情報が何本か電話で本部に寄せられた。そのうち29日の午後2時ころ、三ノ木戸山周辺でそれらしい二人を見かけたというものが最も有力な情報であった。石尾根の登山道は三ノ木戸山を通らず山頂を巻いてついでいるが、三ノ木戸山頂を目指すピークハンターは多い。手

配の服装と似た二人が、山頂から正規の登山道に戻らず、尾根通しに道のない急斜面を下りて行ったというものである。

捜索範囲は絞られた。以前も道迷いによる転落事故があった、三ノ木戸林道上部の岩場あたりで遭難している可能性が高い。無線で捜索隊を集め、その岩場周辺を重点に捜索するように指示した。

無線を通して「一名の遺体発見」の第一報がもたらされたのは、それから2時間後のことである。やはり岩場の下で転落死しているのを発見したという。服装などからSさんと思われた。さらに30分後、そこから水平に150㍍ほど西側に離れた場所でHさんと思われる遺体も発見されたという。最悪の結果になってしまった。何ともやりきれない気持ちで、私は山岳救助車に担架を積み現場に向かった。現場は三ノ木戸林道終点の100㍍ほど手前から、斜度30度ほどの檜林の急斜面を石尾根方向に約300㍍登った所であった。最近フリークライミングでも登られている30㍍ほどの垂直の岩場の上から転落し、さらに檜林の急斜面を40㍍ほど滑り落ち、切り株に引っ掛かって止まったものと思われる。うつ伏せで、くの字に折れ曲がったSさんの遺体は昨日の雨に濡れ、何とも痛々しい。そこから西側に150㍍程いくともう一体、Hさんが仰向けの状態で息絶えていた。三ノ木戸山から道のない所を下ったとすれば、おそらく岩場の上のあたりで薄暗くなっていたろう。まずSさんが誤って岩場の上から転落し、Hさんは岩場を西側から回り込んで下に下りようとしたが、これも疲れからか転落したのではないかと思われた。

二人は三ノ木戸山を下りる時点で踏み跡が無くなっている訳だから、なぜ道のある場所まで引き返さなかったのか悔やまれる。

前回の本仁田山の事故も、今回の六ツ石山の事故も、安全圏まであと数100㍍という誠に痛ましい複数名の遭難死亡事故であった。

吊橋に風の筋あり若かへで くにを

(元 青梅警察署山岳救助隊 副隊長 金 邦夫)

① 将門から日本武尊へ

奥多摩には、巨石信仰の遺産が二つあります。その一つが、七ツ石山の七つの大岩です。ちなみにもう一つは、南米ペルーのマチュピチュを想起させる日原周辺の風景にとけこむ一石山です。

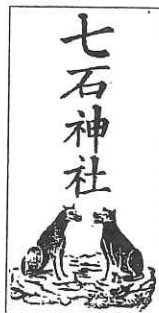
ところで、七ツ石山には、将門主従七人が大岩に隠れ住み、やがて大岩に姿を変えたと言い伝えられています。山頂付近にある神社は、その昔、七石権現と称して将門を祭神としていました。ところが明治時代、神仏分離の際、氏子たちが将門を祭神として届け出ましたが、逆賊・将門は時の政府に却下され、社名：七石神社。祭神：日本武尊となりました。

また、七つの大岩には、次のような言い伝えもあります。七ツ石山頂の将門を三頭山から弓の名手、俵藤太こと藤原秀郷が見事射抜いたというスケールが大きいというか、面白い話があります。

平将門は、七ツ石山頂に立つ将門と六体の藁人形を見分けて射れるものなら射てみよと三頭山頂の秀郷を挑発しました。弓の武将なら“南無八幡大菩薩”と唱えるところですが、秀郷は将門征伐にあたり、成田山に戦勝祈願していたので、不動明王から「早朝、生きている人間なら白い息が見えるはず」とのご託宣に従い見事将門を討つことができたのです。

七石神社の祭礼は11月7日でした。関東各地から大勢の勝負師たちが参詣に集り、露天商が店開きするほど賑わったそうです。ここでは、「七ツ石賭博」が行われ、賑やかな賭博風景が見られたと奥多摩町誌に記されています。

七石神社は、作物の神、盗難防除、村内安全守護神、山の神でもあり、川井集落の「七ツ石講」では、5月6日に代参者がお参りしたということです。ちなみに七石神社の神札には、2匹の狼が描かれ、御神体は将門から日本武尊に代わり、眷属の狼がそれを象徴して描かれています。



② 斧手石物語

七ツ石山に登る人がその脇を通る「斧手石」。それが気になる人、ならない人それぞれですが、大きな石の隣に何やら文字が書かれた石碑に「斧手石記」と読み取れます。さらに読んでみると、「文政年間に4~5人の輩が斧手石を谷へ落とし、その後、村では疫病がはやり石の祟りではと村中で資金を出し合って斧手石を引き上げ、元に戻したところ、疫病も退散した」とあります。

いまどき、「斧手石」をネット検索してみると、奥多摩歩きの達人たちが斧手石についていろいろ書き込んでいます。自ら判読できた文字を克明に記録している几帳面型、文字も判読できないような雑な写真を掲載する雑人、抜群のピント写真でも枯葉に隠れて文字が見えないウツカリ型。これまた人それぞれで役立たずでした。

そこで、旧人類ならではの本棚から古本探し。まず目にとまったのは、昭和7年発行の高橋源一郎著『秩父多摩山・總の海』、昭和13年東京市発行の『小河内貯水池郷土小誌』、昭和19年発行の宮内敏雄著『奥多摩』（1992年復刻）。以上3冊。

この中でも、さすが、東京市編纂の本だけあって、「斧手石記」の全文が掲載されていますので、ご覧ください。ただし、漢字ばかりで返り点もなければ、振り仮名もない完璧な漢文です。

ここで興味深いのは、碑文を書いた普門寺住職の玉隠和尚は、江戸市中にも聞こえた名僧で明治4年、元代官の林鶴梁が小河内温泉に名主・原島古逸を訪ねた折、和尚が不在で逢うことは出来ませんでした。鶴梁の著書『豈止快録』の中に玉隠に宛てた短い漢詩が載っています。

また、先の『小河内貯水池郷土小誌』に小河内温泉付近の名勝を詠んだ「鶴温泉十勝」が掲載されています。玉隠は漢詩、原島古逸は和歌で相唱和して十か所の景勝を讚美しています。一読されると当時の小河内村の文化度に驚嘆します。

蛇足ですが、現在、斧手石がある場所は、七石神社の一の鳥居に当る所と思われます。七ツ石山登山の折りにご確認ください。新しい発見があるかもしれません。

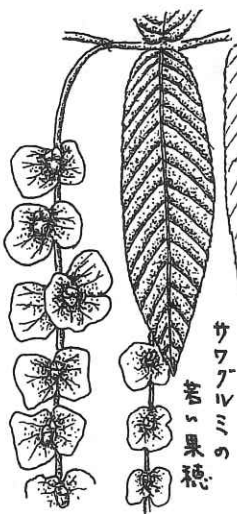
(岡崎 学)

“山笑う”から“山したたる”へ

西洋のことわざに“三月の風と四月の雨が、美しい五月をつくる”というのがあります。このことわざは、日本の美しい自然をはぐくむ四季のうつろいをも、みごとに表現しています。

新緑に映えた山の緑も、日ごとにその色に深みをたたえ、夏の日射しに映え渡るすがたにはまさしく“山したたる”の趣があります。

森の中に入って木々を見上げれば、木々の葉をとおして緑の光がふりそそぎ、その緑に心はおのずこいやされます。農学博士の西口親雄先生の著書に、太陽からの七色の光の中で、エネルギー量が最も多いのは緑の部分との説明がありました。木々を見上げたときに、木々の葉が緑に見えるのは、緑の光が葉に使われないで（吸収されないで）葉を通過してくるからでしょうし、山肌の森が緑に映えるのは、緑の光が吸収されないではね返ってくるからでしょう。樹木は養分をつくるのに、緑光ではなく、なんとそれよりもエネルギー量の少ない赤と青紫の光を使っているのです。緑の光は私たちにやすらぎを与え、林床の植物のエネルギー源となっている樹木からのプレゼントなのです。



山（森）の“したたり”は木々のすがたからも感じます。細長く垂れ下がった若い実を風にゆらめかしているサワグルミ。薄暗い森の中で白い花をきわ立たせながら、木の幹を巻き上がるツルアジサイ。折れた小枝の口元から水滴をしたたらせるミズキ。その様子を見て、木の幹に耳を当てて（時には聴診器を当てて）、幹の中を上昇する水の音を聞こうという観察会まで現れています。

しかし、幹の中を水が上昇する速さは、広葉・針葉樹とも毎秒 1~2ミリメートル。これでは音は聞こえません。聞こえてくる音があったとしたら、おそらくそれは葉ずれの音か、風が幹をなでる音でしょう。したり顔をした過った“観察？”には、くれぐれも気をつけたいものです。

(橋上 一彦)

奥多摩町におけるシカ被害の現状

奥多摩町は東京都の西北端に位置し、全域が秩父多摩甲斐国立公園内にあり、東京都最高峰の雲取山をはじめとする標高 1,000m 以上の山岳に囲まれ、貴重な自然が残されており、数多くの野生動物が生息しております。

奥多摩地域に二ホンシカが生息していることは昔から知られていましたが、昭和 40 年代には狩猟者の増加により目撃例が稀となるほど生息頭数が減少したため、メスシカの狩猟は昭和 22 年から禁止とされていましたが、昭和 51 年からはオスシカの捕獲も禁止となりました。当町では二ホンシカの捕獲ができなくなり、徐々に生息頭数が増え始め、平成 4 年には最大で 386 頭であった生息頭数が平成 14 年には約 6 倍の最大 2,560 頭まで増加し、平成 4 年頃から川苔山山頂下斜面の植林地においてシカの食害が発生したため、周囲 10ha を電気柵で囲いましたが、奥山であり十分な管理ができないため、二ホンシカの食害により下層植生ともに全滅となり、地肌が剥き出しの状態で、降雨時には表土が流失し河川を汚濁させるとともに水源かん養、国土保全など森林の持つ公的機能についてもほとんど機能しない状況となりました。また、雲取山等の高山帯においても、昭和 56 年頃は多くの高山植物が咲き乱れお花畑が広がっていましたが、平成 11 年頃にはシカの食害によりお花畑がすっかりなくなり、マルバダケブキ等のシカの嫌う植物が多く出現することとなりました。そして、平成 16 年 7 月 11 日にゲリラ的集中豪雨が襲い、川苔山東側斜面（大ダワ）の一部が崩壊し大量の土砂が町営水道の主水源である川苔谷に流れ込み、取水施設が埋没する状況となり、自然環境、生活環境ともに大きな被害がありました。これ以外にも水根沢谷を始めとして雲風呂谷・入川谷等で同様の被害が発生し、早急な対応が必要な状況となりました。この緊急事態を受けて、町から東京都に緊急の要望をしたところ、シカ被害関係事業を重点事業と位置付けて実施することになりました。シカの食害により裸山となった森林をみどり豊かな森林に戻すため、シカの被害から植栽木を保護するためのシカ被害防止柵を設置し、苗木を植栽しました。植栽木も順調に成長しすっかりみどり豊かな森へと生まれ変わっています。また、増えすぎたシカを適正な頭数にするため、シカ保護管理計画に基づき東京都猟友会奥多摩支部と連携して有害鳥獣捕獲を実施しています。

今後も野生動物の食害による自然環境の保護や、町民の生活圏内に出没し農作物を荒らした場合は有害獣の捕獲（駆除）を行うなどの対策を講じて、野生生物との共存をめざし、奥多摩町の豊かな自然を後世に残していきたいと思ひます。

(奥多摩町観光産業課農林水産係長 杉山 裕司)

ガイドだより

3.2.1.ジャンプ!!

東京の奥多摩というところへ行った。父と母と弟と私。初心者向けのカヌー教室。小学生の弟の夏休みの宿題対策ということだった。でも本当のところは、お父さんがカヌーに興味があったからだ。それと家族旅行と。私は最近、家族といっしょにいることを避けていると思われていて、そのへんがほんとの本当のところ、そんなことないのに。

そんな私たちの思惑を知っているのか、空はとびきりの空色で、私たちの住んでいるK市は朝からみごとに酷暑日だったし、カヌーは難しかった。弟はうまくやってたけど。父も母も私も、できてるんだか、できてないんだか、よく分からなかった。

そろそろあがろうという時、カヌーの先生が飛び込んで遊ぼうと言った。なんのことかよく分からなかった。川が深いので高い所から飛び込めるらしい。でもそれが遊びと言えるのか。やっぱり分からなかった。これも弟だけが楽しんでいた。飽きずに何度も、登っては飛び込む。お父さんもお母さんも一回ずつやって、最後に私。しょうがない。家族サービスだ。

「ドボーン!!」

水の中は真っ暗だった。目をつぶっていたのかもしれない。頭の先よりもっと先まで、水の中に沈んで行ってしまふ。でも脚はどこにも触れることがない。地面にもどこにも。無重力、そして、浮上。

暗闇のすぐ上は、夏の日がたたずんでいた。川から頭だけ出した状態。地上が見える。みんなが見える。笑顔で手を振っている、ように見える。ほんとは裸眼だから見えない。でも見える。水が入って耳も聞こえない。平泳ぎして向かう。帰還する宇宙飛行士。

こうして、家族旅行兼弟の宿題対策兼父の念願のカヌーは終わった。弟は終始得意げで。お父さんはいろいろ満足したみたい。お母さんは「癒された」と言って、いま私とファミレスのデザートを選んでいる。私は、以前にもまして家族との距離感がわからなくなって、なんかもう笑っている。多分あの時水が入ったみたいで、鼻の奥がジーンとしている。

(伊藤 秀人)

施設案内

「峰谷川溪流釣り場」

緑豊かな峰谷川の清流をいかしてつくられ、都内で唯一ヤマメ・イワナ専用区のある溪流釣り場です。1日釣り放題であることやルアー・フライ専用エリアが設けてあるのも利用者に好評です。

釣った魚をその場で焼いたり、バーベキューも楽しめます。

詳細 <http://www.minedanigawa.com/>

～ ニュース ～

「来させえ奥多摩」に創刊号から、長年山岳遭難救助の記録「山岳救助隊日誌」やエッセー「四季つれづれ」などを連載してきた、元警視庁青梅警察署山岳救助隊副隊長の金邦夫さんが、5月に本を出版された。

「来させえ奥多摩」に連載されたものと山岳雑誌「岳人」に連載されたものを合わせ一冊としたもので「すぐそこにある遭難事故、奥多摩山岳救助隊員からの警鐘」という題名である、ぜひご一読下さい。

こんくにお
金邦夫 1947年山形県小国町に生まれる。高校時代から山に目覚め東北の山々を登る。1966年警視庁警察官となる。1994年から青梅警察署山岳救助隊副隊長として奥多摩に勤務。2013年山岳救助隊を退任する。
(著書より抜粋)

四六版、262頁。東京新聞出版。1400円(税抜き)

平成27年度

登山・ハイキング会員募集

奥多摩観光協会では、当協会が主催するイベントの参加者を募集しています。

会費 1,000円(毎年度)で年5回参加すると、奥多摩温泉「もえぎの湯」の無料券をプレゼントします。(但し、別途入湯料が必要です。)

事前に会員登録が必要になりますので、詳しくはJR奥多摩駅前にある観光案内所にお問い合わせください。

電話 0428-83-2152

次号発行予定：平成27年10月15日

発行 (一社)奥多摩観光協会
住所 〒198-0212 奥多摩町氷川210
電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789
編集 名人・達人観光ガイドの会